
ナツ編集部室の夏

佐乃海テル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナツ編集部室の夏

【Nコード】

N8582A

【作者名】

佐乃海テル

【あらすじ】

教頭を始めとする教員に支配されている学園通信を生徒の手に取り戻し、ビジネスとしての側面も持った活動にすべく、編集部設立を企てる私の幼馴染、なっちゃん。でも行く手はそんなに簡単じゃなくて……

#1 幸せの電話帳 I

私の家の隣に住む幼馴染み、なっちゃん。彼は何かと変だ。幼稚園のころの卒業文集というと、みんなまだ現実の厳しさを知らないから今考えてみるとおかしな夢を書いているもんだ。でもそんなおかしいところが幼稚園生としては標準で、変に現実的な幼稚園生のほうがかえっておかしい。

なっちゃんはその文集に

「新聞記者」

と書いていた。変に現実的なんだよね。

幼稚園・小学校・中学校と同じでこの度第一志望校に合格、高校までまたこいつと同じ学校になってしまった。

そして今日は入学式。学校に早足で付くと「七麦学園高等学校」

と、早口で言ったら舌を噛みそうな校門をぐり抜け、1年の下駄箱へ。真新しい上履きをバックから取り出し、靴を脱いで

「香坂リン」

と自分の名前が書かれた下駄箱を見つけて靴を入れる。C組の所にあるということはC組なのね、と当たり前することに納得し、

「奈津庄平」

と書かれた下駄箱が2つ隣にあるのを見て、小さくつい笑ってしまふ。早速1年目は同じクラスなのね。今年もいっぱい苦労しそうだね、こりゃ。

桜満開の入学式シーズン。1年に1度くらい、それに何と違っても自分が入学式の主役であるときくらい、このムードを満喫したいけれど今までの歴史上思ったことを簡単に成し遂げられた偉人はそうそういないわけで、

「リーナー！ 早く教室に来なよー」
中学の時の友達に呼ばれる。はいはい。私は仕方なく急いで組
の教室に向かった。

順調に式は進む。けれど、私は不安だった。奈津庄平が、入学式
にいまだ出席していなかったからだ。結局今日は出席して来なかつ
た。入学式を忘れる、そんなのは変人が主人公の
物語でも普通はありえない。でもそれが有り得るのが、奈津庄平と
いう人間なのだ。

担任は「柳田美佳」という国語教師だった。とても若い女性教員
で、いかにも皆から共感を持たれそうな先生だった。事実、入学一
日目から女子生徒の人だかりが出来ていた。

入学式最初の教室の風景にありがちな、『普段出席を保健委員に
任せっぱなしの先生がわざと時間をかけて、出席を取る』現象に近
いものが起き、当然なっちゃんの番がやってきた。

「奈津くーん？」

先生、いくら呼んでも床から「こんにちは柳田先生」なんて風に
出てくるいい子じゃありませんよ、彼は。まあそれがいい子かとい
うのもまた別の問題だけど。少なくとも『先生』なんて敬称付けな
いし。

私はこの先生が気に入らないわけではなかったけど、この人波に
まぎれてまで聞きたいことも特に無かったので、一人で下校するこ
とにした。お察しの通り、女子の中でもノリが悪くてあんまり遊び
には誘われないほうですよ、どうせ。

あのアホのことだから入学式忘れてるに１００円とか考えながら、

帰り際になっちゃんの家に行くことにした。インターフォンを押すと、なっちゃんのお母さんが出てきた。

「あら、リンちゃん、いらっしやい。あれ？　なんで制服着ているの？」

なんか驚かれたよ。どっちかというとこっちが驚くシーンのはずなんですけど。

「あ、じゃあ知らなかったんですね。今日入学式だったんですけど」「庄平！」

私の言葉を聞いてすぐになっちゃんのお母さんは玄関から消えた。お母さんの怒りの炎を付けてすまん、と明日学校で謝ろう。

そんなことを考えていたら、なっちゃんとお母さんが一緒に出てきた。

「なんで、あんたは昔から大事なことを親に伝えないの！」

「まあまあ」

そういつて、私は仲裁に入る。これもいつものこと。慣れてます。

「忘れてたの？　今日が入学式だったこと」

質問を投げ掛けると、なっちゃんは始めて口を開けた。

「くだらないんだよ」

質問に答えてない！

「だから、入学式っていう行事はくだらないって言ってるんだよ」

「あんたにとつてはくだらなくても、親にとつてはたった一度のあんたの高校の入学式なんだよ？　あー、もう、おとーさん？　あなたからもしつかり言つてやつてくださいな」

そういつておかしな舞台からお母さんは消えた。

「じゃあ、あんたは今日入学式だって事自体は知っていたの？」

二人きりになったので、会話再開。

「ああ」

一番タチが悪いパターンですね、素晴らしい。

「ふん、用はそれだけか、閉めるぞ。明日は行くから」

「うん、じゃあね」

とりあえず何事も無くて一安心。サボりは自己責任ってことでね。

次の日。本格的に高校生活が始まるということで、ワクワクしている。私はね。彼は別。

「あー、誰か学校を消せ」

入学式サボったくせに高校生活一日目の初めのお言葉として、こんな過激論をなっちゃんは展開した。あんたが今日消されるかもしれないよ？ 分かっている？

「あのなあ、入学式なんてロクな経済効果をもたらさないんだから、意味ねえんだよ」

またすぐそれで片付ける。

「衣装とか買ってくだらん式に参列するぐらいだったら、もっと金かけるべき所あるだろ。結論。バザーが無いうちの学校行事で必要なのは文化祭だけ」

あんたも学校に必要ないよ。

「うるせえな。お前はそんなに成績優秀で教師に可愛いがられるようないい生徒なのか？ そうでもない生徒がいい子ぶってんじゃねえぞ。そんなことしているうちに生徒会委員とか押し付けられるんだ。まあ、俺の知っている話で生徒会の副会長になってム力つく生徒に復讐する話もあるが、あんまり現実的じゃないだろう」

確かに成績優秀とは言えなかった。特になっちゃんを前にしてはなっちゃんも普段章テストなどが行われると眠りについてしまう。もちろん解答していかないから0点なわけだけど、こういうときの彼はやる気が無いだけなのだ。私は知ってる。こんなことをしても、どうせ次の定期試験では平気で95とか100とか取るんだから。

返す言葉も見つからず、黙っている

「あれ、これは俗に言う『言い過ぎた系』か？ それならすまなかった。まあ、楽しい部活でも見つけてしっかり高校をエンジョイすることだな」

「うん！」

力強く返事をして、高校生活にまた夢を馳せる。

どんな部に入ろうかな。どんなこと、しようかな。

私は中学時代美術部に所属していた。絵を描いているのが好きで、特に他のことを考えなくていいのも魅力だったし、何よりほんわかとした雰囲気が好きだった。そんな自分の経験からすると、雰囲気第一な気がする。高校の部活も雰囲気を口コミを参考に考えようと思う。

なっちゃんは中学時代、「部活なんか疲れるだけだ、タコ」とか何とか言って部活動に参加しなかった。高校もきつとそんな風に過ごすんだろうな、となっちゃんの顔を見ながら私は漠然とそう思っていた。

今回ばかりは勝手が違っていたんだけどね。

#1 幸せの電話帳 I（後書き）

長編です。始めから不安定ですがどうかよろしくお願いします。

#2 幸せの電話帳 II

高校生活が始まって半月が過ぎ、4月も後半戦。

私はいつも通りなっちゃんと通学していた。

「そういえば、今日体験部活なんだよね。本当に楽しみなあ」

どんな部活があるのかあまり知らないから、なおさらだ。すると
なっちゃんは

「ふん」

と不機嫌そうな返事をした。

まさかあんだ、また部活入らないつもり？

「入る入らない以前に、体験部活という制度が気に入らない。今ある部活で満足してください、ってことだろう。もっと生徒のクリエイティブな面を押してやつたりしないのかこの高校は。部活くらい自分達でやる気ある奴達に作らせればいいだろう。そうすれば幽霊部員だって少なくなるはずだ。そもそも部活動に参加しなきゃいいんだからな」

部活でも作る気？

「そんな面倒なことあ、しないよ。よっぽどやる気満々でない限りはな」

「おっはよー、リン。今日体験部活だね！」

教室に着くと、私同様みんなもはしゃいでいる。人生で一度しかない高校生活、こういう風に思い切りはしゃがなきゃ！

終礼のチャイムが鳴り、体験部活がスタートする。教室が喧噪に包まれていく中、なっちゃんだけさっさと帰ってしまった。

寂しいとか、あいつは思わないのかな。

友達2人と私は部活をいろいろ回っていくことにした。運動系には入るつもりは基本的には無いんだけど、友達を連れていたので希望があったときは一応付いていつてみていた。もちろん私の希望の部活も友達と一緒に付いてきてくれた。

そうこうしているうちに、体験部活は終わった。ただ、

なんか、ほのぼのした雰囲気、部活が無かった気がする。みんな頑張っているのはいいんだけど、雰囲気はなんだかピリピリしている。「そう？ 別にあんなもんだと思うよ？」

友達2人にもそう言われてしまった。

次の日。少し昨日の体験部活が、なっちゃんの言った通りあまりいい結果をくれなかったため、私は少し憂鬱だった。

そのことを話したらてつきり「だから、言つたる馬鹿」とかで終わらせられるもんだと思つてた。でもなっちゃんの反応は違った。

「部活、作ればいいじゃないか」

あながち反対でもなかった。無かつたら作ればいい。その通りだけど、部活をいきなり立てることなんか不可能で、確か同好会から作って何年かして実績を残さないといけないんじゃないかなかつた。そんなの待つてたら自分はこの学校からとうにいなくなつていいるだろうし、私一人じゃ——いや仮に、仮になっちゃんが手伝つてくれても2人じゃ部活とは言えないわ。あと一人か二人はいないと。

「ふーむ。それは確かに問題だな」

朝のホームルーム。今思えば、これがなっちゃんに火を付けたんだつた。

その日柳田先生は5枚ほどプリントを配つていた。最後に、

「それでは学園通信を配ります」

そういつて学園通信が配られた。なんだかいかにも教師が作つて

いるような一般的な新聞のような冊子だ。とりあえず印刷所に頼んでるので製本はすっかりしていて、これが無料と考えればまあ文句は言えないね、と言ったところかしら。

もちろん内容はさして面白いものでもなく、とりあえず暇つぶしにつまらなそうに見ている生徒が何人かいるだけで、熱心に読んでいる生徒は誰一人として——いた。

なっちゃんだけが一人、真剣にページをめくっていた。その熱心な目に私はもう一度学園通信を見てみるが、さっき見た内容のままで別に面白くとも何とも無い。どうしたんだらう。そう思って聞いて見ると、

「これはチャンスだ」

いきなりなんですか、君は。と学園ドラマで校長が驚くシーンじゃないけど、訳が分からなかった。そんなことを思っている間になっちゃんは席を立って、廊下を走っていった。1限のチャイムが鳴る。授業始まるよ？ あ、戻ってきた。

放課後、なっちゃんの動きが気になったので探してみると、担任の先生に言い寄っていた。

「この学園通信は誰が作っているんですか」

「10年程前までは部活だったんだけど、今は教頭先生を始めとする先生方が作ってらっしゃるの」

「何で生徒に対する学園通信を生徒たちが作らないんですか。小学校じゃあるまいし」

「そんなこと言ったって……」

先生困っちゃってるよ。それくらいにしてあげなよ。

そんなことを思っているとまた、なっちゃんを見失いそうになった。待ってよ。

次は職員室だった。

「失礼します」

と言つてなっちゃんが入っていく。職員室の真ん中の通路の突き当りに教頭の席はある。理事長と校長は別室。真ん中の通路を堂々となっちゃんは歩き、教頭の前に立つ。

「……なんですか、いきなり」

そうだよ、私もそう思う。

「教頭先生は学園通信をお作りになつていらっしゃるんですね？ 何ですか」

「それは部員が0となり、学園の中でも意義のある広報誌を作つていた部活だったから、教員達が力を捧げることにしたのだ」

「それでは」

一度言葉を切った。なっちゃんは次に何を言うのだろうか。

「やる気のある生徒が出てくれば、すぐ部活として明け渡すんですね？」

「ああ、そのつもりだよ」

「じゃあ、明け渡してください」

「え」

展開早いよ、なっちゃん。教頭ついていけないよ。

「お、お前一人の意思では何ともならん。もっと人を集めろ」

「人など後からでも構いません。学園通信編集部を通常の生徒課外活動に戻していただきたい」

そうだったんだ。だから、だからなっちゃんはあるなりに熱心に学園通信を……。

「お前な」

「それともう二つ。部室・予算は現在の上ままでお願いします」

「待てといつてゐるだろう」

「その代わり、学園通信は有料化し購買部での販売体制を整えましょう。利益は……そうですね、そのまま学園通信編集部の予算とする。そうすれば学校側の印刷費用も抑えられます」

「待てと言ってるだろう！」

キレた。

「お前は順序を無視しすぎている！ 何が有料化だ！ 生徒に対する情報媒体を有料化してどうする！ そんなんで損害が出たらどうするんだ」

「本当に欲しい情報媒体だったら、顧客は少しくらいの金を出して買いますよ」

「うるさい！ うるさい！」

「まあまあ」

そこに入ってきたのは、穏やかそうなおじいさん。

「り、理事長！」

そう言っただけ、教頭は黙った。理事長？ このおじいさんが？

「奈津君といったな」

「はい」

「なかなか面白いことを言うね。生徒が見る学園通信くらい生徒が作ってもいいんじゃないかと」

「そうです」

「君の言っていることはわかるよ。ただ最後のビジネス的なことは、難しいな」

「じゃあ、こうしましょう」

「ん」

「一学期中に黒字を出せなかったら解散。これでどうですか。それまで試験運用という形にしましょう。もし利益がなかった場合は廃部。というより教頭先生に実権を戻すことにしましょう。利益が出たら編集部を課外活動として認めてもらいたい」

堂々としたなっちゃん要求。理事長先生もうむ、とうなった。これは、いけるかも。

「じゃあ、その条件ならいいんじゃないですか、教頭先生。生徒達ももつ子供ではありません。学園通信が面白く豊富な内容になり、学園生徒の手に回るようになって悪いかことではないでしょう。彼

も大きな決意を持っているみたいですし、どうですか？」

「……まあ、理事長先生がそうおっしゃるならいいですが、だが！ お前わかっているな！ 赤字が出たら即解散だぞ！」

「結構です。自信が無ければこんな生意気なことぬかしませんよ」
そういつて編集部室の鍵を受け取ると、なっちゃんは教室に戻った。

気づいたら、私だけ残されていた。いけない、いけない。すると、
「香坂さん」

理事長先生に声かけられちゃった。あいつと同類じゃないんだけど。

「いえいえ。ところで、お二人の関係は？」

「幼馴染です」

「そうですか、そうですか。まあ、彼はああいう風にいつも堂々としています、寂しいとかそういう気持ちがないわけでは無さそうです。職員室は出ましたが、きっと職員室の前であなたを待っているんじゃないですか。支えあってくださいね」

にこりと優しい笑みをくれた。失礼します、と礼して職員室を出ると確かになっちゃんが待っていた。鍵を持ったまま。

「あれ？ 部室行ってなかったの？」

「待ってやったんだよ、感謝しろ」

そういつていつもの堂々とした歩き方で部室へと向かっていった。

なっちゃんの着想力はやっぱりすごいと思う。彼は学園通信を生徒の手に取り戻し、有料でも充実した学園通信を作ろうとしている。学園通信編集部。体験部活後の春の日、また一つ部活が生まれた。彼は「作れば？」と人に言ったが、やる気が出て作ってしまったのだ。

私も、部室に入ろうかな。

#2 幸せの電話帳 II（後書き）

次回もお楽しみに。

#3 幸せの電話帳 I I I

……というわけで私は部活面の担当記者になってしまった。

この「……」は原稿用紙2文字分なんだけど、説明すると長いよね。

あれから私となっちゃんは部室へ行った。2階の北棟に位置する部室の扉に「学園通信編集部」と書いてある。もらった鍵を差し込み、開ける。

入ってみた感想？ 簡単に言えば環境としては他の部とは比較にならないくらい、いいと思う。さすが教員が占領してただけあって、まるで小さなオフィスのように。冷蔵庫だとかポットだとかソファーだとか灰皿だとか（？）水道まである。ただ不思議なことに、これだけ設備はいいのに暖房器具はヒーター、冷房器具は扇風機なんだな。

机はとりあえず8個ある。広さから言うと増やすことも不可能ではなさそう。そのうちの3つの机にワープロが置いてある。

「ふむ」

とりあえず部室の中を見終わったとなっちゃんは

「使えないことも無いな」

とコメントした。その考えじゃ絶対他の部に入れないよ、きっとで、なっちゃんは学園通信をどのようにしていこうと考えているのだろう。

「長くなるぞ」

覚悟しております。

「今、そしてこれから集められそうな人数を考えて誌面を『部活面』『学校面』『オピニオン』くらいに大雑把に分ける。

部活面では部活についての情報を発信する。これはなるべくイベントの有無に関わらずほとんどの部活を取材したい。学校面は学校

行事などについての記事。そしてオピニオンは読者によって作ってもらったページだ。購買部にポストを置かせてもらい、企画に基づいてお便りをもらってそれを載せる形が望ましい。

その他部員が書きたい記事、生徒が提出した記事、そして『特集』を載せる。特集はその時期に特化したホットな情報を扱いたい。部員ごとにそれぞれの面の担当はあらかじめ決めておくが、特集に関しては普段の担当とは別に部全体で動く予定だ。

刊行は印刷・製本も考えて月1回がいいところだろう。現行の学園通信と比べたら多いしな」

すごい計画。本当にこの部に対してやる気があるんだ。

「ただ、俺だけがやる気を持っても仕方が無い。当たり前だが部員が必要だ」

私はもう一度部室を見回した。この部室でなっちゃんや他の人と学園通信作り……自分達が作った学園通信が学園のみんなに読まれるという目標のもと記事を書いたり、取材したりしたら楽しいかもしれない。それに……上級生がいなく部員が少なければ、ピリピリした雰囲気になることはないだろう。文章を書くのも割と好きだ。入ってみようかな……。

「なっちゃん」

「ん、なんだ」

「私も学園通信編集部に入るよ」

「手伝ってくれるのか」

「うん！」

いつも無愛想な、なっちゃんが心なしか嬉しそうに見えた。

「じゃあ、香坂は部活面で頼む。俺はオピニオンをやるう。あとはもう一人だな」

もう一人……今学期中に利益を生まないと廃部するかもしれないという背水の陣の状況にあるこの部活に入ってくれる子なんかいる

のかな？

その時ドアが開いた。

「あ、本当にここにいた！よかったー。リン、これ忘れ物」

中学の時の同級生の日野ゆかりちゃんだ。わざわざ教科書を届けに来てくれたようだ。私の場所は職員室で聞いたのかな。

「何してるの、二人？ もしかして、ラブラブ？」

届けてくれた教科書で叩かれない？ 結構今真剣な話中なんだけど。

「どうしたのよ？ わけを話してごらんなさい」

そして今まで話していたことをなっちゃんが話す。

「へえ！ 奈津くん部活作ったの！ すっごいねえ、ああ見えてアクティブなんだ」

やる気があることだね。

「そりゃ、リンと奈津くんが協力して物作ろうつてのに聞き流すのは人情が無いね。よし、このあたしが協力してやろうじゃないの！」
なんか30%くらい誤解をお持ちのようですけど……ま、いっか。利用してやる。

「ん？ 日野が入るのか？」

ちよつとなっちゃんも驚いているみたい。

「悪い？」

「いや悪くはないけど」

「けど？」

「いえ、大いに結構です。どうぞお気の召すままにご自由にゆかりの勝ち。」

「じゃあ、日野は学校行事面担当な」

「まかせなさいっ！」

そんなわけであっけなく部員が2人増えることになり、部活がスタートすることになった。

次の日の活動で、なっちゃんは最初の方針を説明した。

「中間が5月下旬、期末が6月下旬にある。まず6月号を中間に出すことを目標にしたいと思う。あんまりのんびりしていると締め切りは早く来るから注意するように」

「へー、奈津くん計画が周到だねえ。本気なんだ」

ゆかりはそう言っただけで感心しているが、私も感心する。

説明を済ますと、なっちゃんは部室を出ようとした。何やら箱を持って。

何しに行くの？ と聞くと、

「購買部にオピニオンのお便りBOXを置きに行く」

と言った。本当に好きなことに対するやる気はすごいや。

私もダラダラしてばかりはいない。部室をゆかりに任せると、デジカメを持って文化部を取材することにした。まだあまり学校全体には広まっていない部なので、大抵の部には紹介をいちいちしなければならぬのは面倒なだけだね。なるべく写真をたくさん撮ってこい、というなっちゃんの命令どおりたくさん撮った。うん、いい感じいい感じ。デジカメはどうしたかって？ これも部室の物置に備品として最初からあったの。1000万画素のすごいやつ。もう私用に流用しちゃいたいくらい便利。

帰ってくると、また私は驚いた。ワープロがなくなっていた。代わりに、ノートパソコンが3台。1台にはデータ通信のカードが付いている。どうしたの、これ？

「うちの親父の会社の余り物をかっぱらってきた。写真とかを扱うのにはワープロでは役に立たんからな」

さすが社長の息子。とはいえ、インターネットに接続するためのデータ通信のカードばかりは、3人で変わり番するしか無いようだ。

回線があるだけでも十分。

「回線はうちの親父の会社の契約の回線を使えばいい。インターネットがあれば記事を書く際の情報収集にも役に立つだろう」

トイレに行っていたゆかりが帰ってきた。帰ってくるなり「おひょー！」と驚きの声をあげる。

「日野、これから使う表紙のデザインをこのパソコンで作ってくれ」「了解！」

すぐに了解できるゆかりもゆかりだ。すごいよ。

凡人の私は撮ってきたばかりの写真をパソコンに取り込んで、選別作業でもしているのがいいだろう。そう思って、私は自分の席に座ってパソコンを起動した。

#3 幸せの電話帳 I I I (後書き)

次回もお楽しみに。

この小説でやって欲しいイベントがもしありましたらメッセージなどのご意見をどうぞ。

#4 幸せの電話帳 I V

自分達で立てた「学園通信編集部」の活動を始めから早くも半月。5月、男子のYシャツに薄く汗が滲む頃になった。もちろんなっちゃんも例外ではない。部室に入ってくるなり、汗だくのなっちゃんも扇風機を付けて自分のところに固定する。こっちにも回してほしいんだけだな。

締め切りまでもう日も少ない今週だが大イベントがある。

体育祭だ。編集部としてもリニール第1号、これを特集にしない手はない。5月下旬に出す予定の6月号ではなく、その次の7月号に載せるための原稿の準備をしなくてはならなくなった。

「俺は体育祭は個人的には大大大（中略）大大大嫌いなんだが、学園通信としてはこれを特集にしないわけにもいかないから、それなりに真面目に取り組んでくれ」

とかなっちゃんは言ってる。体育祭はなっちゃんのやる気が湧かない行事だということがよくわかりました。

「ここはあたしの出番だね！ 任せてちょうだい！」

そうだった、ゆかりは学園行事担当。だから今回は基本的にゆかりに任せれば……

「馬鹿いうな。特集は担当と関係無いと言っただろ。お前は写真撮れ」

また写真？ カメラロボットみたいにアホみたいに写真撮らせないでよ。文章書くから。

「学校行事に関する文章は提出された入学式の前稿を見る限り、日野の文章が合っている。特集に合う文章が書けないお前はせめてでも写真を撮れ」

はいはい。憂鬱な気分を増加させていると、最後になっちゃんは

付け足した。

「それにお前の写真の腕は編集部一だしな」

さてさて、そうして来てしまった体育祭当日。

今や愛用品となった編集部のデジカメと替えのメモリ等をウエストポーチに突っ込み、なっちゃんからもらった「学園通信編集部」という腕章を安全ピンで制服の袖に固定する。

服装が服装だと、自然と取材するぞ！って感じになる。

……でも高校の体育祭なんてグダグダもいいところ。見物なんて鼓笛パレードと応援合戦くらい。まあでも徒競走のゴールのところの写真とかは綺麗に見えるものだから、なるべく多く撮ってみた。各競技の詳細についての文章は本部テントでノートパソコンに向き合っているゆかりが、今作っているらしい。ゆかりはいいよなあ。本部テントは日に当たらないから涼しいんだろう、きつと。また日焼けしちゃう。なっちゃんも同じ女子に対する扱い方が違うなあ。

暑い中の取材を終えて、次の日から早くも原稿作りに励む。写真を取り込み、選別。今回は特集だから、ゆかりとも相談しながら。そしてゆかりの文章とあわせて完成。

「いよいよ第1号を発行することになるな」

集まった原稿の編集も終わり、表紙も完成。あとはこれを印刷所に出して届くのを待つだけだ。でも肝心の採算は取れるの？

「基本的には大丈夫だろう。ただ出版費用が少し辛いな」

でもまあ、なっちゃんだから大丈夫だろう。この部活を半月やっ

てきて再確認したことがある。それは、やっぱりなっちゃんはすごいってことだ。自分が嫌いなもの——例えば入学式などは拒むけれども、それもある意味彼の信念だと思う。そのかわり、自分のやりたいことはやりたいことで貫き通す。きちんと主義が一貫している。社会に出て成功する人間かどうかはまだ分からないけれども、常人とは違った考えが彼の中でしっかりと立っているのだろう。

そして何日かすると完成品が届いた。届いたのを聞いて部室に来たなっちゃんはニコニコしていたが、宅急便の伝票を見ると無表情になった。どうしたんだろう？

とにかく、完成品の迫力はすごい。ためにサンプルを手にとってみる。自分の書いた記事、載せた写真がこうも綺麗に学園通信として出版されるのに感激を感じずにはいられなかった。やっぱりこの部に入ってよかった。でも、喜ぶのはまだ早い。廃部にならないように採算を取るのはいくらだからだ。まあ、この出来栄なら採算もなんとかなることでしょう。なっちゃんから説明があった。

「これは全てで500部だ。で値段は500円
え。ご、500？

うちの学校は1クラス40人で1学年はA～F組の6クラスの240人、それが3年までなので720人いる。それで500部、しかも突然の有料化——それも500円は少し気軽には手を伸ばしにくい。に全校はどう反応するのだろうか。

「まあまだ7月号もあるから、6月の反応をまずは見てみないとなんとも言えない」

不安は拭い去れなかったが、ここまでなっちゃんはよく頑張ってきたと思う。しっかり計画を立てたんだから失敗しないだろうし、仮に失敗しても責めることはできない。

「よし、3人で購買部に納品しにいこう！」

私達の作った学園通信が、ついにお披露目である。

1週間後。私達は部室に集まった。

結果から言おう。売り上げとしてはいい結果とは言えなかった。赤字が売上帳に記載されたからだ。

売れ行きはそんなに悪くない。だが、ただでさえ印刷費用が高い。並程度の売れ行きでは少し採算が合わないのだ。この少しでも赤字には違いないわけで、大きな弱点となってしまう。7月号でなっちゃんは挽回できるのだろうか。私は右に座っているなっちゃんを見た。彼でさえも疲れたような、不安そうな、何とも微妙な表情をしている。本人は本当に疲れたのだろうか。何か打開策は無いのか……。「……ま、まあ、7月号頑張ろうよ。ね？ それじゃあ今日は帰るね。バイバイ」

ゆかりはそういつて帰っていった。部室に取り残された私達。

「なあ、香坂」
なに？

「お前は文章をはじめとする内容面に問題があったと思うか」

確かに、文章面などはどう考えても以前の学園通信より改善されたと思う。じゃあなおさらどうしたらいいのか方向性が見出せないんだよね。

「ふむ。俺もそう思うよ。内容にそこまで顧客は不満を抱いていない。やはり値段設定が少し悪かったのは一因だろう」

顧客って……生徒の事ね？ 確かに500円はちよつと手が伸ばしづらい。

「だが、500円と言う値段設定を変えるには印刷の段階から変えなければならない。そうしないとなおさら採算が取れなくなる」

うーん。私達の先にある道は破滅？ なっちゃんであつてもさすがに真面目に悩んでいるところを見ると、手助けをしてあげたいと思う。とはいえ、私の専門じゃないしなあ。

部室の窓から射す夕日はいつになく、寂しい。

#4 幸せの電話帳 I V (後書き)

次回もお楽しみに。

#5 幸せの電話帳 V

あの次の日。土曜日。

いつも通り、まるで平日の休みを取ることが出来ずに過労死した父がいて、その敵を取るように昼過ぎまで寝ていた——わけではなかった。

今日は家になつちゃんが来ていたからだ。来たと言うか、呼んだ。一度部活を頭から無くすのも悪くないと思ったから。なつちゃんは私の本棚から勝手に漫画を取り出して読んでいる。こら、その漫画何故そこにあるとわかった？ まあ読み終わってないから隠しておいたのに。

頭を切り替えようという名目でなつちゃんを家に呼んだのに、肝心の呼んだ側の私は学園通信の存亡の危機から頭が離れられない。それくらいこの部に入るときにかけた意気込みは大きいんだけど。

「なんだ、この『幸せの電話帳』って」

私の本棚に少女漫画の一つを指差していった。

「なんかよくわからないけど、その電話帳に書いてある人に電話をかけると幸せになれるんだって。付き合うことになったり、結婚することになったり」

「ふーん」

なつちゃんがそれに手を伸ばす。こいつがそんな非常識なことに文句を言わなかったのが珍しい。さすがにそこは漫画、と割り切る能力が付いたのかな。

それから私はテレビを見て、なつちゃんはその『幸せの電話帳』を読んでいた。

ようやく読み終わると、時差のように今頃文句を言い始めた。「なんで電話帳ごときで、幸せになれるんだバカヤロー」

だったら最初から読むな。分厚い黄色い電話帳で殴るぞ。

「試しに電話帳持ってこい。幸せにできるもんならしてみろってんだ」

誰に喧嘩売ってるの？ 私？ 作者？

「いいから」

よくわからないけど、仰せの通りに私は黄色い電話帳を持ってきてなっちゃんに渡した。しばらく無表情にページをペラペラめくっていたが、次第にそのペースが速くなっていく。どうしたんだろう？ そう思っていた私に突然なっちゃんは言った。

「『幸せの電話帳』……か。なるほど、面白い」

といって少し笑った。何がおかしいんだろう。これが幸せ？

「ちよつと用事ができた。失礼する」

ちよつと待った。どこ行くのよ？

「商店街」

何かある。楽しい予感を胸に私も着替えてついていくことにした。

うちの街には商店街が3つある。中央通り、蓮華通り、撫子通りの3つだ。私達の学園通信の印刷を頼んでいる「片側印刷」は撫子通りにある。なっちゃんは撫子通りへ行き、片側印刷に入った。

「すいません」

印刷所に入ると、なっちゃんが受付に声をかける。

「なんでしようか」

「僕はここの印刷所に学園通信の印刷を頼んでいるんですが」

「七麦学園さんですね。日頃のご愛顧感謝しております」

「そこでなんです、折り入ってお願いが」

「なんでしよう」

「印刷代を安くして欲しいんですよ」

当然の頼みが出てくる。声がきのせいか、少しひそひそ声っぽい。「そう言われても……」

そりゃあそうだ。そんなことを言っているのは今度は印刷所の立場がない。なっちゃんはどうやって抗戦する気なのだろう。

「もちろんタダでは言いません。代わりにうちの学園通信に広告を載せましょう」

「どれどれ、何だって」

途中から受付の後に主人らしき人が立った。

「七麦学園はこの地元ですから、広告により印刷所があることを知れば部活によってはここに印刷を頼むようになるかもしれません」

「ほう。なかなか面白いね。で広告料は？」

「『広告料』は貴社の場合取りません。そのかわりですが、うちの部の印刷出版費用をおさえていただきたいんですよ」

「ふむ。すごい考えだな。高校生とは思えない」

なるほど。電話帳にある広告を見て、そんなことを思いついたんだ。

「よし！　じゃあその広告作戦にのってみよう。じゃあ3割引でどうだい」

「ありがとうございます。それでは後日どのような文面・デザインをするかを聞きますので、お気軽にご相談ください。デザインが思い浮かばなければこちら編集部のほうで考えさせていただきますよ」

「うん、よろしく頼むよ」

「失礼します」

そう、それは本当に幸せの電話帳だった。

それから、なっちゃんと一緒に3つの商店街の店に片っ端から向かい、広告を募集した。受けてくれる店とくれない店は半々で、だいたい2人合わせて10店舗くらい見つかった。

その帰り道、私となっちゃんは目が合うと、嬉しさのあまり笑ってしまった。やっぱり無表情ななっちゃんよりも、こうやって笑っ

ているなっちゃんの方がいい。

月曜日。私達はやる気に満ちていた。

早速広告の準備に、なっちゃんは商店街を回っていく。その間私は編集長代理と一担当記者として、ゆかりと自分に編集を指示していた。期末の勉強もしたいから締め切りギリギリにはなりたくない。そして今度は利益を絶対出すんだ。生徒達が作った学園通信は全般的には高評価だった。でもそれじゃ、満足しない。なっちゃんの喜びの顔が見られなきゃ、私も妥協はしてられないんだ。

それはなっちゃんが戻ってくる直前のことだった。突然の来客だった。

「やあ、君達精が出るねえ。今度はボロ儲けかな？　そろそろ備品の片付けでもしたらどうかかな？」

そして大きな笑い声を上げたのは、紛れもなく嫌味を言いにくた教頭だった。うるさいです。編集の邪魔です。

「すまない、すまない。でも聞くとところによると6月号は赤字だったそうじゃないか。当たり前だ。十年前の課外活動としての編集部と違って、校外製本だからだよ。するとどうしても高くつく。そういう宿命なんだよ。ホッチキスと製本テープを持ってきてあげようか」

「それは不要です」

入ってきたのはなっちゃん。暑い中巡回お疲れ様。

「7月号では圧倒的な利益で教員方を驚かせて見せましょう。そして街中でこの学園通信は知れ渡ることになるでしょう」

「君の自信は知らないが、街中に知れ渡ることはあるまい」
「あります」

なっちゃんの強い自信とまなざし。それから逃げるように教頭は、

「まあせいぜい頑張ればいい」
と言って立ち去った。

また全ての原稿が集まり、7月号の発行時期。また宅急便で届いた。なつちゃんは伝票を見て勝利を確信した笑みを浮かべて、
「勝った」

と言った。もちろん私も嬉しかったんだけど、まだ発売してもないのにそんなに喜んでいいのだろうか？

一週間後、学園通信編集部は生き残っているのか？

#5 幸せの電話帳 V（後書き）

学園通信編集部の存亡をかけた戦いの火蓋が切られました。
次回もお楽しみに。

#6 幸せの電話帳 VI

部数は6月号と同じ500部、値段は下げて250円。
果たして利益を出すことは本当に出来るのか？

教室のベルが鳴る。試験時間が終わり、私はうんと伸びをする。
最終科目の英語が終わった。まああの出来かな。

テストが終わったとあって、教室内が活気に満ちている。でも私はこのまま家に帰るわけにはいかない。部室へ向かわないと。

すると、なっちゃんが突然私の肩をポン、と叩いて

「さ、最終科目だぞ」

わかってますとも。そう言っつて、なっちゃんの背中についていく。

「やったな」

なっちゃんを始めとするみんなが喜びを噛みしめていた。

7月号の利益は6月号の赤字分をものにならないほどの莫大なものだった。

これで学園通信編集部は生き残ることが決まったのだ。

「やったねー、奈津君が頑張った甲斐があるじゃないかー」

ゆかりも喜んでいる。もちろん私だって。

すると、部室の扉がノックされた。珍しい来客だ。そう思って開けてみると、いたのは教頭だった。

「皆さんにこれから重大なお知らせがあります。職員室へ来なさい」
教頭の声は不機嫌そうだったが、まんざらでも無さそうな様子だった。

「失礼しまあす」

3人で職員室に入る。何故か我々は教員の注目の的になる。こんなに職員室って怖いところだったっけ？

「君達学園通信編集部はこの1学期の功績から、正式に課外活動として認められることになった。あの部屋は君達の部室だし、予算も部活運営委員会から支給される。来年度の進入部員の募集も認められる。とりあえずまずは、予算の希望票と部活動名簿を提出しなさい」

「はい、わかりました」

職員室の教員からの暖かい拍手。皆我々がしたことを全て知らされているのだろうか。

すると教頭の後ろにいた理事長先生が、

「頑張つてこの学校で誇れる学園通信を作り上げていてください。生徒達が発信する媒体のほうで、生徒達も読みたいと思うでしょう。それにどうです、取材などは楽しいもんでしょう」

「はい」

これは私が返事した。この3人の中で一番取材をしたっていう自信があるから。

「頑張ってくださいね」

優しい笑みを返してくれた。

「じゃあ、部室帰るぞ」

なっちゃんらぶつきらぼうに、でも心なしか嬉しそうに私達を呼びかけた。

「でもさ」

職員室から部室への帰り道、私は気になることがあつてなっちゃんに聞いた。

「何であんなに自信を持って利益を出せるって言ったの？」

「ああ、それか」

「あたしも気になるなー」

ゆかりも便乗。

「実は1部も売れなくても利益は出たんだ。広告収入でね」

声が出なかった。そこまで広告収入でまかなうことができたなんて。

「その上、安くなった分売れ行きも伸びたからな。ボロ儲けだ」
心配事は無くなった。我々は勝ったのだ。

私たちは高校時代を、学園通信編集部で過ごすことになった。

そういえばその後、ゆかりからプレゼントがあった。

「こんなもん作ってみたんだよねー。うちの部室寂しいから、看板くらいと思ってさ」

ゆかりがバッグから出したのは、小さな木のプレート。紐がついていて、部室の扉にかけられそうだ。そのプレートには「ナツ編集部室」と一文字一文字木の文字の部品がボンドで貼られていた。

「くだらないもの作りやがって」

となつちゃんと言ったが、きちんと部室の扉に付けて帰った。素直じゃないなあ。

「ナツ編集部室」。この部室でこれからいろいろなことがありそうだ。

そんなことを思いつつ、部室の鍵を閉めた。

#6 幸せの電話帳 VI（後書き）

短編「幸せの電話帳」

ここまでが前置きです。

ここからはこの学園通信編集部を舞台とした短い話が続いていくことになります。

これからもよろしく願います。

#7 ナツ編集部室の夏 I

存在が絶対的なものとなった学園通信編集部と編集長なっちゃん。
七麦学園学園通信編集部としての初めての夏が始まる。

「合宿……ねえ」

なっちゃんは乗り気じゃなかった。そう、合宿である。

「いいじゃん！ 行こうよ行こうよ。予約しておくね」

待ちなさい。誰も行くなんか言ってます。

ゆかりの暴走の元凶は今日の部活の始まりから見ないといけない。
あの教頭の顔をもう一度見なきゃいけないのか……。

それではもう一度終業式の日へ、ワープ。

普段すごい面倒くさそうに学校へ行く人も、今日と言う日はイキ
イキして見える。そう、今日は1学期の終業式なのだ。まあこうい
う生徒はまだいい方で、終業式の日からもう夏休みだと考えている
人もいる。通学中の私の隣に。

「あ？ どうせ40日間の夏休みを有意義に過ごしましょう、チャ
ンちゃん」だろ？ わざわざ連れ出しやがって」

いいから終業式は行くの。入学式サボったことも「終わりよけれ
ば全てよし」ってことでね。まあ私の記憶からは絶対過ぎ去らない
けど。

終業式はつつがなく終わった。確かになっちゃんの言ったとおり
「40日間の夏休みを計画的に有意義に過ごしましょう。1学期不
本意な成績だった人はこの夏に克服しましょう」と言うテンプレー

トが校長から読み上げられた。

教室でのホームルームでは生活についてのプリントが配られて、通知表が配られた。個人的には高校の勉強も健闘したと思う。クラスでもまああの順位だろう。でもなっちゃんには勝てない。そんな通知表を机に置いておいたら、誰かに盗まれて名前書き換えられるよ？

教室内でも学園通信をチラホラ読んでいる人がいた。ホームルーム中に読むのは良くないけど、でもやっぱり嬉しい心持がする。そんなこんなで私達のごたごたした1学期はようやくエンディングテーマが流れ始め、夏休みが待っていた。

誰だ、エンディングテーマを中断してもう一本お話を入れたのは。それはゆかりだった。

「奈津君、話があるんだー」

ホームルーム終了後のC組の教室、間延びした声でB組から来たのはゆかりだった。

「なんだ」

入部してきたときから、なっちゃんはまだゆかりの話を快く思っていないのだろうか。

「部室行かない？　ここよりも話しやすいし。リンも来て」

私も嫌な予感がしてきた。3人で部室へ向かう。

部室の鍵を開けるのは私。二人はスタートダッシュの準備をしている。スタートダッシュというのは夏の時期、うちの部で恒例となり始めた扇風機の取り合いである。私がいつも負けるのは鍵を開けるからかな。あ、開いた開いた。

「取った！」

大人気ない声を上げて、なっちゃんが扇風機を自分の席に向けてスイッチを入れる。

「涼風だなあ」

この野郎、こっちはサバナだぞ。

「で、話なんだけどね」

ゆかりの話が始まった。

「合宿行かない？」

え？ 合宿？

「うん、合宿。私中学は陸上部だったから合宿があっただけど、合宿ってすごい楽しいのよ。部活と関係無いこととしても楽しいんだから！」

なっちゃんの顔は扇風機の風を受けているはずなのに、暑そうな顔になっている。

「合宿……ねえ」

これで冒頭部分に戻るのだ。

「いいじゃん！ 行こうよ行こうよ。予約しておくね」

待ちなさい。誰も行くなんか言ってます。

「うちの部は学園通信編集部なんだから、夏は9月特集の高校野球取材しか予定は無いだろう」

高校野球の話はまた今度。とにかく、夏は予定が無い。

「いいじゃん！ みんなで遊んで仲良くなるーよ！」

「たった3人で遊んでどうするんだ」

正論だ。ゆかりも敗れたかと思ったら、

「じゃあ奈津君の家の別荘はどうかな」

「おいこら、勝手に使って言い訳がないだろう」

「昨日奈津君のお父さんに許可を取っておいたけど？」

「親父……だから昨日の晩飯の時に『合宿するのか？』なんて聞かれたのか……」

「肝試しとかいいんじゃない？」

「え」

部室が凍った。なっちゃんに肝試しは禁句であることを知っている。こう見えて結構怖がりなのだ。といっても最後に肝試しに行ったのは私の記憶の中では小学2年生のはず。

「怖いのか？」

ゆかりのほうが怖いです。誰かこの幽霊を止めて。

「いや、別に行ってもいいんだが」

「じゃあ、決定」 8月の始めのほうね。高校野球が始める前にしたほうがいいでしょう？はばないすさまじ」

ゆかりは帰っていった。ある意味なっちゃんより実権持ってるのかな。

「やれやれ」

私達も帰ることにしますか。

なっちゃんの別荘は伊豆にある。伊豆も結構幽霊が多いと聞く。

まあ、そんなことはどうでもいいんだけど。

私もそんなに乗り気じゃなかった。首都近郊のここでは、伊豆なんてのはそこまで珍しいものでもなく、高校生にもなれば北海道にでも行ってみたいもんなのだ。でもなっちゃんは北海道には別荘は持っていないし、子供達だけで北海道に行くのも大変だ。子供でもないけど。

そんなわけで、私もなっちゃんも8月1日が大雨になることを必死に願った。そんなことを思っていると、台風が3つ発生した。氣象予報士も「明日は日本上陸」と言っているし間違いない！

合宿は中止になるという前提のもと、私は夏休みを過ごしていた。

#8 ナツ編集部室の夏 I I

台風はどこへ消えた？ なんていうベストセラーを書きなくなるようなきれいな晴れ空だった。また私は気象予報士を信じられなくなった。

当の私やなっちゃんは行きたくないのに、私の親やなっちゃんの親は行かせたがっている。こんなに文句なしの晴れではサボる理由を考えるのにもそれなりの体力を使う。……完敗だ。

「ほらー、リン仕度しなさい。遅れるんじゃないの？」

母親がせかすせかす。行きたくなさそうなのが分からないのかな。さてそろそろ仕度しないと……中学からいい服が減っちゃったかな。

「えーっと、日野さん、リンちゃんも来たね。じゃあ行こうか」

「出発！」

私となっちゃんの元気を1とすると、なっちゃんは500くらいじゃないかな。

私達はなっちゃんのお父さんの車に乗る。なっちゃんの両親、編集部3人で行くことになる。

なっちゃんが真ん中で、左に私、右にゆかり。伊豆まで車でそのまま行くので、そうそう無いトークタイムとなるのだが……。

「いやー、合宿も無事晴天晴天！ 感謝感激アメアラレだね！ やっぱり期末で採点ミスをきちんと先生に報告した行いが返ってきたのかな！」

本当に元気ですね。隣のなっちゃんはげんがりしている。真ん中は辛いね。

「元気だね、日野さんは」

そんなことを言っただけなののお父さんが釣り糸をたらずもんだから、2人の間で会話が成立する。私はというと、お母さんと話していた。

「この間はごめんね。入学式なんてサボると思わなかったから」

「いえいえ。このバカだからそんなことだろうと予想はできていましたから」

「リンちゃんにいつもお世話になっただけだし、もうこのままお嫁さんになってもいいんじゃないか、ねえお父さん」

「そりゃ、いつでも大歓迎だよ。庄平は俺に似て面倒くさがりやだから、リンちゃんみたいなのが付いてないとダメだ」

「何それ、私ってリンちゃんみたいに可愛いつてこと？」

「はっはっは」

何言っただか。そう思って右を見ると、なっちゃんは疲れているのか寝ていた。良かった。

車は私達を運んで伊豆へ向かう。なっちゃんのお父さんが途中の道で窓を開けてくれたのだが、それはそれは普段体験することのできないような強い、磯の香り。

「ここらへんは海も山も揃っている理想郷だからね。海の幸でも晩御飯は食べよう」

伊豆は慣れているとはいえ、美味しい物があると聞けば飛びつかない手はない。心の中がうきうきする。

「あー、いい匂いだ」

いつのまにか隣のなっちゃんは起きていた。

「こりゃー、絶景だね！ リンもいっぱい写真撮っておきな」

ゆかりにそう言われて思い出した。カメラを持ってきたんだ

った。カバンからいそいそと取り出すと、窓際という地の利を生かしてたくさん撮った。

編集部に入ってよかったことの一つに、写真の良さに目覚めたということがある。私の誕生日は7月なのだが、今年の誕生日は思い切ってカメラを買ってもらった。この年頃になって欲しい物をねだることが無くなったのだが、何年ぶりかに父親にカメラをねだってみたら、

「え？ カメラか？ そうかそうか、買ってやろう」

と嬉しそうに返してくれ、買ってくれた。父親にとって娘からお願いをされるというのは、いつになっても嬉しいことなのだろうか。その日の父は若返ったようにも見えた。

メモリを交換しないと、と思っているうちに奈津家の別荘に着いた。時間はまだ11:30。

「とーちゃーく！」

なんでゆかりが言うのかな。

「さ、降りてまずは伸びでもしたらどうだい」

なっちゃんのお父さんに開けてもらい、車から出る。なっちゃんもまどろみながら出てきた。ってまた寝てたのかよ。

「睡眠は貯蔵物だからな。貯めておける時に貯めておかないと」
だからって小テスト中に貯めるのは良くないと思う。

簡単な昼食を近くで食べた後、3人は海で遊ぶことにした。とってもやる気なのはゆかりだけ。私となっちゃんはパラソルもないビニールシートの上でのんびりしていた。

「ひゃっほー」

奇怪な掛け声とともにゆかりは海へと飛び出して行った。彼女は海でも死なないんじゃないか、と思う。

「まったく、日野の元気をもらいたいくらいだ」

なっちゃんは呆れている。あんだだってたくさん寝てたじゃない。
「ふん」

返事に困ったらずでそれでごまかす。

それにしてもまぶしい太陽の下。みんながキヤーキヤー言っている海は夏ならではの物だろう。砂の城を作るわけにもいかず、何かをしようと思っていいたら、

「海の家、行ってくる。何食いたい」

「うーんと、いちごの力キ氷」

「わかった。すぐ戻ってくる」

なっちゃんはそう言って海の家へと行ってしまった。

近くだし、一緒に行ってみたい気もするが、ゆかりのためにビールシートに誰かはいなくてはならない。何故にこんなにもどかしいのか。ただ海の家に行っているだけ。帰って来ないわけがないし、すぐ帰ってくる。でも何故か辛かった。そんなことを思っているうちになっちゃんが帰ってきた。すごい時間をかけて帰ってきたように感じる。

「ほい、いちごミルク」

「遅い」

何でだろう。力キ氷を受け取って、少しぶっきらばうな返事をしてしまった。

「何怒ってんだよ。5分もかからなかったぞ」

それは本当だろう。でも何だか辛い気持ちは消えなかった。それから私となっちゃんは無言で力キ氷を食べた。

それからゆかりもすぐ戻ってきた。ゆかりも力キ氷が食べたいと言うので、買ってきてやろうとなっちゃんと言ったが、それを振り切って私はゆかりの分の力キ氷を買ってきた。もうあんな長く待たされるのは御免だったからだ。ゆかりの分をさつさと買って戻ってきた。ゆかりは別荘への帰り道食べながら歩いていた。そして、不思議な空白の時間が流れる。

「どうだい、楽しかったかい」

別荘へ帰ると、なっちゃんの両親が迎えてくれた。

「楽しかったです！」

ゆかりは誰よりも先に答えた。

「元気だなあ」

なっちゃんのお父さんもこう素直に反応されると嬉しそうだった。世界中の父親はこう娘に弱いのだろうか。それがたとえ他人の娘だったとしても。

「今晚はバーベキューにしようと思うんだ。まあ、せっかく合宿に来たわけだし夜は楽しみがいろいろあるだろう。だから晩御飯は早めに済ませることにするから」

「お心遣いありがとうございます」

ゆかりの裏に行くわけではないが、私は普段の付き合いの分礼儀正しく。

「じゃあ、買出し手伝ってくれるかな。女の子二人で」

なるべく自然にそう言ってなっちゃんのお父さんは準備を始めた。やっぱり娘に弱いんだ。なっちゃんは一人っ子だからかな。

奈津家の別荘は海・山も近いけれど、買い物のもそもそこまで悪くなかった。往復10分くらいの道のり、でも話をしているとそんなに長くも感じない。

「ねえ、リン」

帰り道、なっちゃんのお父さんだけ前を歩いている中小さい声でゆかりに声をかけられた。

「なに？」

「さっきは何怒ってたの」

その声はゆかりとは思えないほど、穏やかな声だった。
でも私自身何を怒っているかわからない。

「そう……」

それ以上ゆかりは何も言わなかった。

#9 ナツ編集部室の夏 I I I

そして17:00頃私たちは晩御飯を食べた。夏なので17:00でもまだまだ外は明るかった。料理も美味しかったし、何よりゆかりとなっちゃんと食べる晩御飯は新鮮だった。さっきの気持ちがまだ自分の中でも整理がついてないけど。

女性陣から先にお風呂に入った。

お風呂は露天風呂と内湯とまるで宿に泊まっているような設備で、私とゆかりはただただ驚いていた。もちろん別荘だから貸切である。うーん、幸せ。こんなものが物心付いたときからある人間が隣に住んでいるなんて、神様の与える物は不平等なものだ。

そして、ようやく寝るまでの間自由時間が出来る。

「さっ、腹ごなしに肝試しでもすつか!」

ゆかりの縁側での一声により、本題が来てしまった。

「おじさん、このあたりで肝試しにいいスポットありますか?」

ゆかりはなっちゃんのお父さんに肝試しのスポットを聞いた。でもその答えは簡単だった。

「ここに来た時に墓地があつたろう? それでいいんじゃないか」

「墓地なら絶好ですね」

何が絶好だ。なっちゃんも同じような表情をしている。

「リン、高1にもなつてお化けが怖いのか?」

そういう問題じゃない。

「心が弱い人はすぐ憑かれちゃうらしいから、気をつけてね! じやあ私から!」

「はい、懐中電灯ですよ」

そういつてなっちゃんのお父さんから渡された懐中電灯を心の友に、ゆかりはさっさと自分から肝試しに向かった。

……

さすがは提案者だった。5分くらいでさっさと戻ってきた。

「ぜんっぜん怖くないよっ！ 懐中電灯持ってるからね。ちよっとした冒険だと思って行っごらん、奈津君！」

「わ、わかったよ」

その返事は、少しいつものなっちゃんと違うような気がした。

……

戻って、こない。

「遅いねー、奈津君。妖怪にでもとりつかれたのかい？」
縁起でも無いこと、言わないでよね。

「それとも道迷ってるのかしら、おじさん！」

「なんだい」

「懐中電灯もう一つありますか？」

「ああ、あるよあるよ」

なっちゃんのお父さんは用意がいい。バッグの中からも一つ懐中電灯を取り出してゆかりに渡した。

「じゃあ、次はリン」

何てことを言うんだ。

「あんた、何言ってるか分かってる？ 私一人で行けというのは肝試しだから許すとして、なっちゃんの面倒を見て来いというの？」

あんたが企画したんだから自分で責任取りなさいよ」

私はあくまでも突っ放すような言い方をする。

「そう。じゃあ私が行ってくる」

そのゆかりの発言が聞こえたとき、胸の中で大きな物が動いた。そんな感覚。そして次の瞬間には

「私が、行く」

と言つて、私は懐中電灯を持って歩き出していた。後ろから、
「やっぱりね」

というゆかりの声が聞こえた。

墓地に踏み出したものの、後悔は早く訪れた。

まずいところに来ちゃったな。というかこんな暗闇をどうやって
ゆかりはあんな早く戻ってきたのだろう。

なつちゃんのお父さんの話によると、墓地への入り口と出口は別
で、どちらも奈津家の別荘に別のルートで行き着くらしい。引き返
したらそのことがバレるし、何よりなつちゃんを置いてけぼりにし
てしまうことになる。

この責任は自分で負うしかない。諦めながら、歩を進める。

途中にベンチがあった。とりあえず座って一息つこう。そんなに
焦らなくてもいい。そう思った私は警戒レベルを下げることなくゆ
っくり、ゆっくりと腰を下ろした。

「きやつ！」

おもわず声をあげた。自分の尻に何か変な感触を感じたからだ。
そこにはなつちゃんがいた。

びっくりした……なつちゃんか……ってそんな場合じゃない。何
でこんなところで寝ているんだこいつは。とうとう肝試し中にまで
睡眠を貯めるようになったか。寝息も立てないで寝ている。少し様
子が変わったとは思いつつも、なつちゃんの体を揺らして起こそうとす
る。

「なつちゃん、なつちゃん」

3回ほど体を揺らすと、なっちゃんの体が動いた。そして上半身から徐々に上がっていく。

だが、少し様子が違った。

「こ、こうさか……」

「ど、どうしたの？」

なんかヤバイ。でもどうしよう。寝ぼけてるのかな？

「な、何寝ぼけてるのよ！ 起きなさいよ！」

そう言っとなっちゃんの体を思い切り叩いたが、その様子に変化は無い。

「こ、こうさか、お、おれ」

な、何よ。

「おれ、お前が……」

次の瞬間、上がっていた上半身がぐくりとベンチにまた落ちた。

そして今度はすーすー、と寝息を立てて普通に寝ていた。

やれやれ。肝試しだって言うのに、幽霊なんかよりよっぽど厄介な物を背負ってしまった。

なっちゃんを抱えて、出口らしき方へと向かう。なっちゃんは懐中電灯よりも強い味方だったことは否定できない。

「おそかったぞー！」

ゆかりが不満顔で出迎えてくれた。だが、次の瞬間驚いた顔をした。

「何？ 奈津君寝てたの？ 仕方が無いなー」

あんたのこの企画も仕方が無いよ。なんだかこんなに余計な疲れにまみれる肝試しは初めてだ。なっちゃんを縁側に下ろして、ふうと大きな溜息をつく。

あれからはこう特に無く、普通の合宿を合計2泊3日で過ごした。

チェスをやったり、部室から持ってきた野球盤をやったりと、部室の出張所で過ごしているような気分だった。

当の寝ていたなっちゃんは翌朝何事も無く、目を覚ました。彼は肝試しの途中、突然大きな睡魔に襲われたこと以外記憶に無いという。幽霊にでもとりつかれたんだろうか。

無事だったのは何よりだが、もう少しとりつかれていて欲しかったと思う面もある。

『おれ、お前が……』

その先は何だったのだろう。などという甘い青春を送る高校生らしい馬鹿馬鹿しいことを一瞬考えた後、帰りの高速道路の景色を車の窓からぼんやりと眺めていた。

#9 ナツ編集部室の夏 I I I (後書き)

「ナツ編集部室の夏」

表題作です。まだ終わりではありません。I Vから先は次からの短編「アツアツ甲子園！」をはさんでお送りします。タイトル通り今度は部室の風景を。

#10 アツアツ甲子園！ I

話の上では合宿が終わってしまったが時は1学期末、まだ合宿も知らされていない頃にさかのぼる。

編集部の生き残りをかけ無駄にヒートアップした教頭との戦いも勝利を果たし、高校生として初めての”夏休み”というビッグ・バケーションに一女子として私も期待をしていた。

その日何やら学校が騒がしく、また野球部の生徒がいつになくチヤホヤされていたことに、ああ今の流行は野球部なのね、などと理由もわからずに私は無理やり納得していた。とはいえ、その規模が大きいもんだからさすがの私でも気になった。

放課後、教室掃除をしている時に「口じゃなくて手を動かさなさい！」と言われない程度にほうきを動かしながら、友人に聞いてみた。

「野球部がなんか騒がれているけど、何かあったの？」

ごく自然に聞いたのに、相手からはすごく驚かれた。さすがにほうきを落とすところまではいかなかったが、その驚きにこっちも驚く。友人はものすごい勢いで事を知らせてくれた。

「知らないの！？ ほら、うちの野球部が甲子園行くの！ 本当にリンは時代遅れだなあ」

知らなかった。さすがの私もそんな自分を流行に鈍感だと思わずにはいられなかった。しかも部活で学園通信を作っている全校の3人のうちの1人として知れ渡っている今、それは確かに恥ずべきことだった。

七麦学園高等学校野球部は元来、普通の高校の野球部と同様に体育科の教員が監督を受け持っていた。

それが4年前に新任の体育教師に変わったわけだが、その新任教師は自分のようなアマが教えてもパフォーマンズにもならないと判断し、予算を少し犠牲にして専門の監督を要請した。それからメキシコと地区大会などで頭角を表すようになり、今年ついにそれがついて甲子園出場までこきつけたわけであった。その監督の腕は名実ともにすごいらしく、野球部員の誰に聞いてもこう答える。

「厳しいけど、すごい監督だよ。この実力とペースから言うと5年以内に甲子園で優勝してもおかしくないな」

その後教室のゴミ箱を全校のごみ収集所に持っていく途中、私は考えていた。甲子園出場はなかなか無い機会。これを学園通信で取り上げるのは価値がありそう。それに甲子園の舞台で観戦をする機会も首都圏にいてはそうそう無い。その中で撮る写真も格別だろう。自分と編集部にとってこれだけ利潤の大きい特集企画はないだろう。

そして教室に戻り掃除の反省会を終えて、部室に向かう途中にあることに私は気がついた。たぶんなっちゃんならもうすでにそんなことを知っていて、今日部室に行けば話題は野球一色に違いない……。

的中率99%の予感を胸に部室のドアを開けた。

その通りだった。編集長の机の後方にある小さいテレビにはいつの録画だか分からない野球のビデオがいたって適当に映されており、なっちゃんとゆかりは野球盤で勝負をしている。そして何故か二人

ともユニフォームを着ている。予感的中しただけでなく、実際はその上を軽く越して短絡的だった。

「お、香坂。まずはこれを着ろ。話はそれからだ」

馬鹿じゃないの。なんでユニフォーム着て部活に参加しなきゃいけないのよ！ っていうか着なくなつて、何でこんなことになつていいのか教えることは出来るでしょ。何で着てからなのよ。

「今度うちの学校の野球部が甲子園の高校野球全国大会に出ることになったから、取材の予行演習だ。ん、あー、くそ！ 消える魔球かー！」

「へっへー！ 油断してるね！ 甘いよ！」

なつちゃんもゆかりも何言つてんだか。

でもこんな部室は想定外だったわけではない。教頭からこの部活と部室を生徒の手に取り戻したわが部は、もうすぐ夏休みなのをいいことに備品や設備を使いたいだけ使つて好き放題していた。この間なんかゆかりが力キ氷作るやつを持ってきて、力キ氷作つてたんだから。まあ、美味しかったけど……。

そんな学園通信編集部にとって甲子園は果たしていい刺激となるのか。それともただの暇潰し程度にしかないのか。

8月1〜3日に合宿をし、ようやく夏休みも本番かと思えば高校野球の開幕は7日。帰ってきた次の日の4日には部室に集合して力メラ等の備品の整備をして、出発の準備もしなければならぬ。何を思っているんだか、うちの家族は過度な期待をしているようだ。

母は、

「甲子園の土持ってきてね」

買わないとダメだから。まあお土産でね。

父は、

「座席一個くらい盗んで来い。ソファアの調子が悪いんだ」

何立派な犯罪を推奨してるのよ。夏のボーナスはどうしたのよ？と聞くと、父はぎよつとして黙りこくった。まったく。

小3の弟は、

「ホームラン打ってきて」

私は野球部じゃない！

家族の馬鹿みたいに大きい宝の期待を背負って私は旅立つのだった。

8月4日午後。私達は部室に集まり、荷物作りを始める。実質的には今日夜行列車に乗るような形である。明後日が開会式となる。

カメラやメモリ、ノートパソコンを積むのはいいが野球盤も詰めているのは何故？

「だって、ほら、甲子園だからさ！」

ゆかりは甲子園をでっかい野球盤だとも思っているのだろうか。悪いけど、消える魔球などという設備は甲子園には付いてないよ？だいたい本物の試合が見られるんだから不足はないでしょう。

夕方、学校の校庭のそばの野球場で野球部と合流して出発。この近くの交通機関は私鉄が中心なので、一度JRに乗り換えられる近くの駅まで私鉄で行き、それから夜行列車でゆっくりゆっくり甲子園の待つ兵庫県西宮市へと乗り込んでいった。

夜行列車は結構格の高い部屋を取ったようでベッドの付いた個室となっており、これまた贅沢なことに学園編集部室にも1つの部屋

が与えられたのである。ありがたい。

夜行列車に乗り込むと、待つてましたとばかりゆかりがランプを取り出し大富豪を始めるわけだが……最低でも4人いないと盛り上がらないことを実感し、すぐに飽きてやめてしまった。それから晩御飯が来て、食べるとすることが無くなったのかゆかりは眠ってしまった。

「さてどうしたものか……」

こっちもこっちですることが無いなっちゃんはノートパソコンを開き、インターネットにつないでいる。私も横からのぞく。なっちゃんは高校野球のトーナメント表を見ていた。すると、なっちゃんは横にいた私に顔を向けて聞いてきた。

「何回戦まで勝つと思う？」

「うーん、行つて2回戦じゃない？　いくらなんでも準決勝は……」。

「決定。じゃあ俺は準決勝までに賭けるから、負けたら500円な」

えっ、聞いてないよ。

甲子園を賭博場とするのは野球部の方々に大変申し訳ないが、楽しみが一つ増えたのは事実。それから少し会話を楽しんでから、やがて私達も床に就いた。

#11 アツアツ甲子園！ II

昨日早く寝たこととあいまって、私は割と朝早く目を覚ました。でも早いと思ったのは自分の中の感覚だけであって、他の二人はもうすでに起きていた。外の景色だけではどこにいるのか分からないので、なっちゃんに聞いてみる。

「もう大阪だ。兵庫に着くのも時間として遠くない」

夜行列車はずいぶんノロノロと走っているな、と思った。夜行列車としては当たり前なのだろうが、普段乗っている在来線と変わらない速度で遠くの兵庫まで行くのは不思議な気分だった。

西宮市に到着。早速練習を始める野球部たち。私達はその波にまぎれて、選手一人ひとりの詳しいデータを収集していた。

「いいか、まずは選手の詳しいデータをつかむ。スポーツ新聞が人気の理由は、スポーツに関するデータが何よりも豊富だからだ。今回スポーツを特集にする俺らもこれにならうんだ」

西宮に着いたときになっちゃんにそう命令されたように、私たちは練習中の選手達・監督からお話を聞かせてもらった。いい監督という噂は私も本当だと思うほど、人柄はいい方だった。私達の取材にももうすぐ本番だから、などと言わずにしっかり受け答えてくださった。それどころか、

「文化部も忙しくて大変そうですね。頑張ってください」

という励ましの言葉をにっこりとした微笑みと一緒にいただいた。なっちゃんもこの人を見習ってアメとムチを使い分けて欲しいものだ。とはいえそれも覚悟の上で自分から入っただけだ。

そんなこんなで高校野球選手権大会が開幕することになった。開

幕初日から快晴！ うーん、気持ちいい。

初日から七麦学園野球部は対戦である。相手は聖ハーモニカ学院高校。変な名前！ ははっ！ と笑ってやりたい気が脳内をよぎるが、考えてみれば七麦学園なんて舌噛みそうな名前も笑おうと思えば笑えるのでこらえた。どちらも甲子園初出場校で、お互いの高3は最後の鼻舞台を飾ろうと必死だろう。しかしこの試合でどちらかはもう二度と甲子園に立つことはできなくなる。

……プレイボール。

傍観者である私でもうちの学校がそれなりに強い野球部になったのはよくわかる。守備はソツなくこなせているし、攻撃もそれなりに積極的だがかといって選球眼がダメでやみくもに攻撃をするわけでもない。

だがここは甲子園、それは聖ハーモニカ学院も同じだった。しかし、聖ハーモニカ学院は外野フライが割と多かった。敵側のスタンドから「あー……」という溜息まじりの歓声が聞こえているうちにその小さなバッティングの実力の差は5点差として出た。7対2で勝った。次の試合は2日後、どうにかもう2日ここに残れるようになったようだ。

「勝利のコメントをお願いします、監督っ！」

と本当にいそうな新聞記者の役回りをしていたのはゆかりだった。監督も私のとき以上に持ち前の元気を振りまいて選手達をも喜ばせている。やっぱり明るい方がモテるのだろうか。かといってこんな私が急に明るくなっても……などと思いつつ隣に相変わらずの無表情でつつ立っているなっちゃんを見上げる。するとジャストタイミングでこっちに顔を向けてきた。

「ここからが勝負だな。準決勝まで行くか、2回戦で負けるか」

ああ、あの賭けね。確かにこれから勝負。まあ、ここで負けたらお互いノーマネーになって恨みつこなしの無難な結果になったと思うが、私達2人の賭博で野球部全員を振り回せるほど運命は甘くない。

宿に帰ってからノートパソコンを起動、試合の状況を頭が覚えて
いるうちに文章に起こしておく。もっと詳しい流れはなっちゃん
がテレビをDVD録画したやつを遠征終了後に持ってくるので、その
時の部活で加えるつもり。

2回戦。対戦校は永崎工業高校。見るからにマッチョ揃いだ。
…で、何故に監督が女性？ 美人の監督だと選手は俄然やる気にな
るのだろうか、何だかいやらしい。これなら負けるかもなどと野球
部の皆さんに対して不謹慎にあたることを考えつつ、プレイボール。

……バットの振りが重い。タイミングがうまく合っていなかった。
ある意味1回戦よりも快勝。というわけで10対4で勝利。同時に
私の負けも確定した。おい美人、どういうことだ。

「勝利のコメントをお願いします、監督っ！」

こっちの女も頑張ってるけど……。次は2日後の準決勝。自分の
負けが決まると帰りたくなるのは負け犬の遠吠えだろうか。

「まだ勝ちかどうかは分かん。俺は準決勝で負けると予想したか
らな。決勝に進んだら負けだ」

そんな励ましなんだかどうか分からないコメントを言われ
ても嬉しくないが、まだチャンスはあるということなのか？ う

ーん。

準決勝。相手校は平峰高校。負け確実……私もね。なぜなら平峰高校は去年の優勝校だからだ。いくらなんでも新参者がしゃしゃり出てきて勝てるものではない……と思っただらそうでもなかった。

9対9。乱打戦は延長10回を迎えていた。とりあえず野球部の遠征に付き合っているという身の上、

「行けー！ 行けー！ な・な・む・ぎ！ 強いぞ強いぞな・な・む・ぎ！」

と皆と同じように応援するが、編集部3人の中で純粋に本気で応援しているのはおそらくゆかりだけだろう。なっちゃんもこの試合で勝ってもらっては困るのだ。ほらその証拠にいつもの不機嫌顔がさらに不機嫌に見える。おい、顔に出すぎだぞ。

とその時、金属バットにボールが勢いよく当たる爽快な音が球場全体に響いた。ホームラン、そして塁を走り去っていったのは平峰高校の生徒。

こうして野球部の夏は終わった。そしてなっちゃんの思いは甲子園に届いた。

「残念でしたね監督。今年の敗因と来年に向けてのコメントを」
ゆかりもただ明るくというわけではなく、心なしか声が心配そうである。なるほどこういう気配りをせずにズバズバ言うから私はモチないのか、くそつたれなどと考えつつ隣のなっちゃんを見る。するとまたジャストタイミングでこっちを見る。

「500円で何が買える」

聞かれているようだ。ジューズ何本かとかじゃない？

と言うと黙った。そして手を出す。何500円今出させて？ 汚いな。

「勝負は勝負」

敗者の意見が優先されるケースはごく少ないってね。私は観念して財布から500円玉を取り出して、なっちゃんの手に渡した。渡してすぐ手を引く。なんだか恥ずかしいから。

「ちよつとそこいらに出てくる。すぐ戻ってくるから」

そう言っただけで応援席から去った。懸命に取材をするゆかりと、さつきすぐ引いた手を取る自分が残された。

結果から言うと、なっちゃんは缶ジュースを4本買ってきた。4本。もちろん3人で飲めば1つ余ることにゆかりも私も飲みながら気がつき、目がふと合う。一気飲みして空き缶入れに自分の缶を投げ捨てたなっちゃんの目がようやく問題の、残り1本に向かう。

「……」

「……」

「……」

沈黙。そしてようやくまとまったようだ。なっちゃんが口を開ける。

「日野、試合後の取材ご苦労だった。残り1本やる。俺はもう腹いっぱいだ」

そういつてゆかりに手渡した。ゆかりはそれを受け取ったが、しばらくして言った。

「あ、あたしもお腹いっぱいなんだ！ だから、リン！ リンにあげるよ！」

ジュースは今度は私の手に渡った。嬉しくないわけではないが、私もお腹いっぱいだ。

「じゃあ、いい」

そう答えるとゆかりの時とは逆にあっさりと私の手から奪って、

苦しそうに一気飲みした。 なっちゃんもお腹いっぱいだったのだから。 それとも。

次の日の帰りの夜行。 逆に私とゆかりが起きていて、 なっちゃんがぐっすり眠っていた。

「あたし、別にお腹いっぱいじゃなかったんだけどね、 あれはあたしのジュースじゃなかったから」

前振りもなく突然ゆかりが私の目を見て行った。 真剣な目で。

あのジュースは誰のジュースだったんだろう。 残り1本のジュースはまだ心の中で飲みきれていない。

#11 アツアツ甲子園！ イエ（後書き）

「アツアツ甲子園！」

少し夏に編集部を活躍させてみようと思ったのに、コイバナになってしまいました。だから行き当たりばったりは良くないのに。

次回「ナツ編集部室の夏」の続きです。

#12 ナツ編集部室の夏 I V

どこかで誰かが八月三十一日にしか宿題をやらない人がいるみたいな文章を書いていたが、普段から偉そうな口を叩く一女子として普段から君臨しているからには、せめて勉強くらいは！ とさしたる大きな旅行も無いお盆には優等生並みに宿題に励んだものである。そして勉強をほったらかしにして後で血の涙を流す羽目になる運命が待ち受けているであろう他の学生を尻目に、私は残り少ない、けれどももうしるめたさも無い勝ち組の夏休みを過ごしていた。もちろんなっちゃんもその部類で、彼の場合は最初の一週間で終わらせたい。

8月30日。夏休みもあはれ、あと2日。

することも無いので、パソコンをつけてソリティアをやっていた。それもさして楽しいことでもなく、すぐ飽きてしまった私は何ゲーム目になるであろう新規ゲームから目を離して大きく伸びをした。昼寝もいいかな、と思っていたその時である。携帯のバイブレータが部屋に鳴り響いた。たまにしか来ないメールか……あとで見ればいいやと思っていたらなかなかバイブレータが止まらない。メールなら4回で止まるのに。ということは着信か。携帯を開いて電話に出る。

「もしもし、香坂です」

「おう香坂、急だが明日は部活だ。弁当と宿題持って部室集合」

電話の相手はなっちゃんだった。

普段だったら溜息をつくのだが、今の今まで暇つぶしにソリティアやって昼寝でもしようか考えていた身分である。忙しいとはまだ小学生で分からず屋の弟の前でも言えない。行く、と返事をして電話を切った。急にやるが増えた。

……弁当に入れる冷凍食品買って来ないと。

香坂家では休暇中は部活前2日以内に部活があることを言わないと、弁当を作ってもらえないという中途半端に厳しい制度がある。母親にスーパー行つてくると伝えて、自転車のストッパーを外して門を出た。

それにしても宿題って？

次の日、耳元で目覚まし時計が鳴っている。何故だ、今日まで夏休みのはず。最終日くらい寝かせてくれよ。それともあの馬鹿弟の仕業か？ そんなことを考えつつ目覚ましを止めて二度寝した。

「そうだ、部活だった。」

飛び起きた私はそれと同時に弁当を自分で作らなければならないことにも気が付いた。冷凍庫から冷凍食品を手当たり次第取り出してレンジに放り込む。その間に弁当箱を探す。そうだ、アルミホルも必要だった。そんな風にしてレンジとキッチンテーブルを行き来する朝。父親、母親、弟が啞然としていた。啞然としている暇がうらやましいよ。とりあえず中身が入った弁当箱を肩下げカバンに入れて、玄関に向かう。宿題は昨日入れておいた。

「いつてきますっ！」

9時からの部活なのに、校舎の時計は9時10分。夏の暑い中走ったからうだるような汗をたらしていた。部室に駆け込む。ドアを開けると目の前になっちゃん。ただでさえ走っていて心臓が激しく動いていたのに、それがクールダウンされることは先延ばしになっ

た。

「10分オーバー。校庭5周」

は？ 走って来いと？ 今それ以上の距離を走ってきてフウフウ言ってるのに？

「冗談だ。それより……」

なっちゃんが普段しない不思議な表情を見せて、

「Yシャツが透けて、」

「うるさい！」

肩下げカバンであいつの顔面を思いつきり殴った後、部屋に入って真っ先に扇風機を取って乾かすことにした。

なんで、こうも敏感な年頃の子に向かつてそんなことを言える神経がどうやってたらか出てくるんだろうね、まったく。などと怒っていたら隣にいるゆかりに気が付いた。ゆかりは原稿を書いて……いなかった。それ以前にパソコンを付けていない。彼女がにらめっこしているのは、化学の問題集。そう、ゆかりは血の涙を流す羽目になる、否流す羽目になっている生徒のひとりだった。さすがの私も可哀想に見えてきたが、何、宿題持ってこさせたのはまさか、

「その通り、日野の宿題を手伝うためだ。お前は化学の問題集を晒せ」

はあ？ ということは、

「まともに問題をやっていたら始業式まで部屋に残ることになるだろ。宿題合宿か馬鹿野郎」

何怒っているんだか知らないけど、ゆかりの無計画な夏休みの結末にどうして付き合わなきゃいけないのよ？

「記事のネタにしてもいいだろ。とにかく他の部員の一喜一憂に付き合うのもいいもんだろ。たった3人の部活なんだし」

わけの分からない説得に乘せられてしまう私も私である。何故拒否しない。1時間後には問題集のノートを写していた。ゆかりのノ

ートに自分の答えを。そして悪いがゆかりは自分ほど出来るわけは無いので、ところどころ間違いを植えておく。丸つけをしながらどれが正答でどれが誤答か既に分かっていると言っのは、複雑な気分である。

そんなことをしながら時間は過ぎていく。横にいたなっちゃんもパソコンゲームをやっている。覚えていろよ。

#13 ナツ編集部室の夏 V

午後になると、宿題もあらかた片付いてゆかりも自分の家でできる程度の量になっていた。私は荷が下りたので、9月の学園通信のための原稿を書こうかとパソコンを起動した。甲子園は準決勝まで進んで負けるという初出場とは思えない好成績をたたき出してくれたおかげで、学園通信もかつてない利益を決算でたたき出してくれるのではないだろうか。

ゆかりはまだ問題集とにらめっこしている。なっちゃんはパソコンゲームをしている。うかつにも私は暇だなー、と漏らしてしまっ

た。

「ん」

なっちゃんが反応した。

「暇なら面白いことはあるんだが」

面白いこと？ 面倒なことにならないだろうね？

面倒だ。激しく面倒だ。場所は近所の駄菓子屋に移る。河川敷の上にある、昔ながらの駄菓子屋である。

「じゃあ、頼んだよ」

このおばちゃんとは幼稚園の時から知り合いである。私達のこともよく知っている。で何を頼んだのかな？ 今日の運勢はすごく悪い気がするのよ。事実悪かった。

次の行のおばちゃんのセリフではない。私のセリフだ。

「いらつしやいませー、カキ氷はいかがですかー」

何がそんなに悲しくて秋の兆しも見え隠れする8月31日に、カキ氷を食わなきゃいけないんだろ。それどころか何故カキ氷を売らなきゃいけないんだろ。

「なっちゃん！」

私はカキ氷をいそいそと食べるなっちゃんを睨んだ。なっちゃん

は即座に弁明する。

「だますようなことはこれっ、ぼっちもしてないぞ」

「これっ、ぼっち」のところで人指し指と親指を使った。

「手伝うって言ってもバイトなんて……ってというか何故お前は食ってる」

「美味しい力キ氷をアピールしてるんだ。あー、お・い・し・い」
頭痛をこらえた顔にしか見えません。

そういえばゆかりは宿題の残りをすると行って帰ってしまった。
昨日まで宿題が残っていない自分は優越感を持っていたが、今では利用されるだけの優越感に嫌悪しか残っていなかった。

いつしか部活の終了時刻も過ぎて夕方、夜になってしまったではないか！

そりゃあ、私だって怒る怒る。

「いい加減にしろ、この馬鹿！」

なっちゃんを思いつき殴ってやった。

「お、おい！ こら！ やめろ！」

やめるものか！

「庄くん、お約束のもの用意できたよ」

その時、後ろにいた駄菓子屋のおばちゃんが声をかけてきた。私は殴るのをやめた。

「すみませんね」

「バイト料にはもってこいだろ。リンちゃんも楽しんできな」

え？ 何を？ そう思っていると私の背後から爆発音が響いた。
振り向くと既になっちゃんは座っている。そう、花火だった。

「座れ。見えないんだよ」

何だか癪にさわるが、花火を見るとすーっと疲れが引いていった。
いや体力的には変わらないんだろうけど、精神的に。正直ゆかりの宿題の話なんか言った割には午前には終わらせてたし、実はこの花火

がなっちゃんにとってメインだったのではないだろうか。なっちゃんの夏にとって、学園通信編集部の夏にとってのメインイベント。それを私となっちゃんだけで見た。

花火が私達の夏休みの終わりを告げた。

次の日。9月1日。2学期の始まり。

なっちゃんは始業式には出た。いや出させた。でも以外とあいつにしては素直に出てきたほうで、

「ま、始まりをしつかりすることには意味があるだろう」とのこと。

ゆかりは欠席だった。宿題が終わらなかったのかな、と思ったらそれは本当のことです。今日は登校してからずっと部室にいたようだ。午前の式典が終わり、終業後に部室に行ったらいたので驚いた。あの意味なっちゃんよりも悪質なことにしている気がするんだけど気のせいかな？

私達の夏はそうやって終わりを告げた。実はまだこれ以外にも話にはもう少しあるんだけど、それはまた別の機会に。

#13 ナツ編集部室の夏 V（後書き）

「ナツ編集部室の夏」でした。

これでこの作品は終わりですが、シリーズ自体は始まったばかりです。しかし他にもいろいろ書きたいものがあるので、そちら優先で行きたいと思います。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8582a/>

ナツ編集部室の夏

2010年10月8日15時53分発行